

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

『旧約聖書』における聴覚の位置

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 1985-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/680

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



『旧約聖書』における聴覚の位置

中川 栄 照

はじめに

ヨーロッパの思想には、ギリシアの思想とヘブルの思想とが流れこんでおり、その合流点を、時代的にヘレニズムの時代と称している。ところで、これらを二大文化の潮流とはいえ、背景は単純な要因から生じたものではない。例えば地理的、民族的、政治的、言語的、宗教的など、多数の要因が、相互に密接し、重複し合いながら、築かれたものである。それゆえ思想を鳥瞰的に捉えることには問題がある。思想における内部の要素は、決して単純なものでも、合理的なものでもない。思想は、内に相対的な立場をもち、歴史的にして、流動している。この流動性を基にして、一方知的視野を拡張しながら、なおいっそう複雑なものにしてきている。以上のような事情を胸におきながら、ギリシア思想やヘブル思想の特質を掲げようとするれば、それは比較的、と表現せざるを得ない。さて、この比較的、の見方を踏まえ、ギリシア思想の特質を挙

げると、視覚的な要素を挙げることができるであろう。例えば名詞の神 (*Bas*) が *Basos* (わたくしは見る) という動詞に由来している。すると神は、〈見るもの〉と訳出することができる。つまり神の内実は、存在する全てのものを自分自身の内に見るからであって、神は自分自身の外には、何にもをも存在しないのであるから、自分自身の外には、何にもも見ることはない、という理由が成立する。さらに名詞の *Bas* (*Idea*) が、動詞の *Bas* (*idein*)、すなわち見る、に由来しているなど、また *Basia* (観想)、見る、ことが、見る (*Basia*) の動詞に由来しており、のちに理論 (*Theorie*) をして結実するものである。これら〈見る〉としての視覚 (*Bas*) は、最初感覚的な機能として働いていたものの、しだいに現象の背景へと、その本質を求める結果、感覚から知覚を経て、認識が成立する根拠を、知性の働きに依存することになった、といえよう。*Basos* (神話) の *Basos* (理論) 化は、そのことを物語るものである。一方ギリシア思想は、存在 (*Bas*) に、独自の見方をもっている。それは *Basos* (自然) すなわち *Basos* (存在) における一連の内的関係に、

ex nihilo nihil fit (無からは無) が生ずる、という思惟の原則が見い出せる。つまり存在からは、存在が生ずるのであって、無から存在が生ずる、とするユダヤキリスト教の思想とは、対称的である。ギリシア思想が、合理的 (rational) であるのと、ユダヤキリスト教が、非合理性 (Irrationalität) を信仰 (fides) において克服しようとする態度に、相違がある。ギリシアの思想が、視覚 (Zyōg) — 観想 (Oepia) の機構に特質があったが、この機構は、なお新プラトン主義においても、うかがうことができる。つまりプラトン (Platon) やアリストテレス (Aristoteles) の影響を受けたプロティノス (Plotinos) の思想において、一なるものへの神秘的合一 (unio mystica) に先きがけとしてのヌースへの観想を重要視する。それに関連して、例えばアリストテレスが、人間は観想 (Oepia) によって、できるだけ神に似たものとならなければならぬ、ともいつている。この観想の機構は、さらにアウグスチヌス (Augustinus) における神認識へと影響を与えるものであった。さらに近代における観念論も、Idealismus (形相主義) と称すべきものであって、その根本機構は、〈見る〉にあるといえる。このギリシア思想に対して、ヘブル思想では、聴覚の働きが、きわめて重要である。この聴覚 (Aozō) の機能が、他の感覚器官より重要である、とする。その理由の一つに、聖なるもの、の理解がある。聖をヘブル語で qōdēs と呼んでいる。この語の内実には、二つの意味がある。その一つは、「明るい」、「輝く」を意味し、他の一つは、「分離」、「隔離」を意味する。さて視覚と聴覚とを比較するとき、視覚より聴覚の方が、遠隔性においては、性質上長じている。例えば神をいかにして認識できるか、の問題は、視

覚における形而上学的な解釈に基づくものであって、隔離性よりも、より近接性が働いている、といえよう。したがって隔離性をもって、一つは神聖の根拠としているヘブル的な態度とは、異にするものがある。つまり神が認識するに可能であるとする態度には、神の位置を近くし、低くするものである、との見方が成立しよう。それでは、聴覚を通して、具体的に働きかけるものは、なにかである。

『旧約聖書』では、言葉 (dabar)、詩、歌そして音楽を挙げることでできよう。旧約時代においては、文字文化というよりも、口承による伝承文化の形態が主流であり、文字による視覚文化よりも、聴覚文化つまり聴従の文化の比重が、いたって大きいといえる。この言葉、詩、歌および音楽等が、ヘブルの宗教における聖なるものと、どのように関係するのかは、それらが、宗教Ⅱ再結 (religio) における機能とその位置に關係する問題でもある。この本流は、ギリシア思想に求めるよりも、ヘブル思想における啓示的な機構に求めるべきであろう。具体的には『旧約聖書』における聴覚の働きを、言葉や詩、歌、楽器等をめぐって追究する必要にせまられてくる。しかしながら、ヘブルでは楽譜がなかったことから、その音楽が、どのようなものであるかは、現在具体的に知ることはできない。音楽についても、独唱のほか、合唱があったことは明らかであるが、今日のような和声的な合唱ではなかった、とされている。それゆえ、音楽がどのようなものであれ、音楽に関しては、『旧約聖書』のなかに求めることに結果する。ただし、そのなかでも音楽に関しては、有名な音楽家と称される人々(註一)、音楽に対して、特に理解があった人々を挙げる程度にとどまるであろう。したがって『旧約聖書』

における詩、歌および音楽が、ユダヤキリスト教の本質と関わっているとしても、なお本稿では、楽器 (*Organon*) に限定し、楽器が『旧約聖書』において、どのような役割をはたすかについて、究討することを意図するものである。さらに加えて、ギリシアの音楽をめぐって究明する際に、その仕方は次の三つに大別できよう。それは、まず音楽を哲学的な次元において究明すること。次に音楽学の見方により音の組織を主として問題にし究明する仕方。さらに楽譜法を中心とする科学的な究明の仕方等である。ところで本稿は、最初に掲げた音楽を哲学的な次元にのみ限定すること、および宗教の視点から、論述することを意図するものである。

一

ユダヤキリスト教が、ギリシア・ローマの *σοφία* (知恵) に接したとき、互いの立場に、相違することを発見する。そして、この異質であるとする思想の出会いには、キリスト教において混乱を招くと同時に、放置できない問題であった。それには、まずキリスト教の優越性を示す必要がある。つまり両思想の本質は、並位的な立場からでは、決して融合し、一致する立場にはなかった。その相違は、すでに「はじめに」で、触れたように、ギリシア思想の合理性の内実を、*ex nihilo nihili* が生ずるといふ、ロゴス (論理) 的な思考によるとすれば、ユダヤキリスト教の思想は、*ex nihilo cuncta* (虚無から全て) (註二) が生ずる、とする信仰の思想を根幹としている。しかしキリスト教は、のちにこの対立性

を、信仰の真理のもとにおいて、克服しようとしている。ところで聴覚が、ヘブル思想において、重要な機能をはたしたとすれば、その歴史の流れからしても、必然的な意味で、これらの問題とは、無関係ではないと思われる。それゆえギリシアの精神 (知性) との出会いと、その克服をキリスト教の精神活動のうちにかがう必要がある。そこで、ここではパウロ (*Paulos*) が、直接した知恵の種々相から、問題の糸口を求めてゆくことにしよう。パウロは、ギリシア的な合理性精神に対する批判を試みる。その例証が、コリントスの人々に与えた書簡のなかにかがえる。そこで、ひとまず『新約聖書』に入ることにしよう。

パウロによれば「すなわち、聖書にへわたしは知者の知恵 (*sapientiam sapientium*) を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしものにする」と書いている。知者はどこにいるか。学者はどこにいるか。この世の論者はどこにいるか。この世は、自分の知恵によって神を認めるに至らなかった。それは、神の知恵にかなっている。そこで神は、宣教の愚かさによって、信じる者を救うこととされたのである。ヘブル人はしるしを請い、ギリシア人は知恵を求める。しかしわたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝える。このキリストは、ユダヤ人にはつまづかせるもの、異邦人には愚かなものであるが、召された者自身にとっては、ユダヤ人にもギリシア人にも、神の力、神の知恵たるキリスト (*Christum Dei virtutem, et Dei sapientiam*) なのである。神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからである (註三) といっている。ここには神の知恵を承認しない人々が掲げられている。それによると、ギリシア人を特に知者と呼び、賢者と称する人々が、それである。このなか

には哲学者も、勿論含んでいる。ここで知恵における二つの立場が、明確にしるされておられ、それによれば、知恵を理解する立場と知恵を信する立場とである。ギリシアの思想では、知恵はものごとを理解するうえでの根源的な依りどころとなるものである。ギリシアにおける哲学 (*philosophia*) が、*philo + sophia* による合成語で、知恵を愛求する意味であったが、初期ギリシアにおいては、この知恵が経験知であった。つまりこの知恵の意味が、見聞による知識の増大に、その主たる目的があったがゆえに、経験による知識への欲求を、知恵の愛求であるとしている。例えばホメロス (Homeros, ca. B. C. 800) やヘシオドス (Hesiodos, ca. B. C. 700)、*ヘロドトス* (Herodotos, ca. B. C. 485—425) などにおける知恵 (*sophia*) は、経験的な知恵であるといつてよく、むしろ *science, Wissenschaft* に近いものとして捉えてよからう。一方哲学の始祖としてタレス (Thales, B. C. 624/3—546/5) を挙げるが、かれにおいては、物活論 (*hylzoism*) の域を出るものではない。人間における内面的な知恵の追究が、自覚のかたちをとって現われたのは、ソクラテス (Sokrates, ca. B. C. 470/69—399) である。ソクラテスの真知 (*ἐπιστήμη*) への追究は、徳への実践を通して捉え得るものとしている。この意味から、きわめて実践的な知恵であった。一方プラトン (Platon, B. C. 427—347) における知恵は、*idea* (真実存在) としての理想の知恵で、この *idea* を愛求し、これを実現するところに目的があるとした。プラトンの思想は、ソクラテスの実践知に加えて、理論的な知恵が存在することを示した。特にプラトンの思想では、視覚性が強く、それがイデア論のうちへ収斂している。プラトンのイデアは、*eidōs*

(形相) と同じ意味であるから、かれの思想は、形相主義 (*eideticism*) (註四) である、といえよう。この形相優位の傾向、すなわち視覚性優位は、なおプラトンのみならず、アリストテレスの思想においても、伝統的に継承されている。アリストテレスは、知恵について、理論的なものと、実践的なものとに大別したが、かれは哲学を、存在者一般を根源においてあらしめている第一の原理、アリストテレスによれば、*to ti ên einai* (これは—である) は、*ti estin* (何んであるか) の問いに答えるべきものであり、これこそが、真に存在する、といわれるものである、としている。この根源的な問いに、答える第一の原理について、究明しようとする普遍知は、やはり理論的な知であって、*θεωρία* の立場を優位なものとする。つまりアリストテレスにおいて、*θεωρία* の生活が、一方で神 (*θεός*) との共存の位置を示すものである。したがってかれの哲学が、第一哲学 (*πρώτη φιλοσοφία*) を指しているとはいえず、神を究極の目的とする以上、神学 (*θεολογία*) にほかならない。しかしこの神は、キリスト教の神と違って、信仰の対象となるべきものではなく、理論的な必然性から、生じたものである。さてアリストテレスの哲学は、存在論 (*ontologia*) とはいえず、その根底は、純粹形相としての神を考へており、質料 (*hylē*) もまた究極において、第一質料としては、本来の質料の性格を失なっており、むしろ質料の形相への運動とその傾斜がうかがえる。つまりここには質料の形相化がある。この形相優位は、*νοῦς* (理性的直観) *θεωρία, θεωροῦν* 等の関連のうちにかがえよう。このことからアリストテレスも形相主義の線上にある。この形相主義は、一方で観念論 (*Idealismus*) としつ、以後中世、近代を通じて今

日に至るヨーロッパを、質料主義 (hylism) と共に、二つの潮流となつて貫流している。アリストテレスの考えにもうかがえたように、神は運動の究極原因としての不動の起動者であった。ここでキリスト教の神と相違する点は、アリストテレスの神が、存在者といえども、人格 (persona) をもった存在者ではない。したがってかれの神は、信仰の対象となるものではないところに、キリスト教の神とは相違する。さて、ここでパウロの指摘にまで戻ろう。パウロが批判するギリシア人たちの知恵は、神の奇跡を信じない。それはすでに触れたように、ギリシアの知恵は、ロゴス(論理的)な性格をもっているからである。したがってギリシア人の思惟とキリスト教の信仰、真理 (veritas fidei) を確信するところの思惟とは相違する。のちにこの理性と信仰、哲学と宗教との関係は、いっそう具体的な問題へと展開するが、ここでは視覚とギリシアの知恵との関連に触れたところで、再び聴覚の問題に帰るとしよう。

二

聴覚の思想は、ヘブル思想に強い傾向であるとみたが、しかしギリシア思想にも、それが無いといっているのではない。つまり聴覚と文化は、言葉や音の世界のうちに生ずるものである。したがってギリシアにおける言葉の世界、特に詩と歌との関係に、うかがうことができるし、また音の世界は、音楽において、特に歌唱や楽器をもって具体的なものになっている。しかし実際旋律において知り得たものは十二曲にすぎない。ライヒテンリット (Hugo Leichtentritt, 1874—1951) も、その現存する

楽譜を挙げている(註五)。

また楽器についても、*κithára* (cithara) や *aulos* (aulos) *λύραι* (lyre) *σαλπίγξ* (trumpet) が、挙げられよう。ラッパの種類としては、筒が長いものと、曲ったものがあった。筒が長いものを *salpinx* といひ、曲ったものを *keras* と称していた。また太鼓の種類には、*lympanon* と *kymbala* と呼ぶ銅鈸のような小さな楽器が存在していた。その他拍子を取る役割としての楽器については、数多い。ところでギリシアの音楽は、他の諸国からの影響がうかがえる。例えばエジプトやアッシリア (Assyria) からの、それが考えられている。アッシリアについては、直接的ではないにしても、当時の近接諸国からの影響を通じて、ギリシアに持ち込まれたものと思われる(註六)。例えば *αὐλός* についても、フリギア (Phrygia, 小アジアにあった王国) から入ったもの、との説がある。しかしエジプトにおいても、すでに笛の類は存在していた。例えば *Sebi* (*sebi*) や *Mam* (*má*) である。この *Sebi* は、長い芦笛で、管が一本のもので比較的長く、これを吹くためには、腕一杯伸ばす必要がある、とした。また一方 *Mam* は、二本の管を、一端で一つに結び附けたもので、角笛などが使用されている。したがってギリシアの音楽が、エジプトの影響によるところがあるとするならば、ここにも接点をみることができよう。しかしながら、もはや今日では、それを実証するだけの確たる資料に不足しているゆえ、推測の域にあるものも多い。

当時の文化間の相互における複合性を考えるとき、今日のように、国家が確立し、国家と国民とが、各国民の自覚によって秩序正しい関係にある場合とを、ここで区別して考える必要がある。例えばユダヤ (Judaic)

の民族と、その歴史を考えると、ヘブル民族が、文化の復合化に抵抗し、それが一方で民族の純粹性に結び付いてゆき、そしてこの純粹性は、神ヤウエ(YHWH)の単一性(unity)と結び付いている。つまり、この姿勢は、「申命記」六章の四における「われわれの神、主は唯一の主である。 *Καὶ Ἰσραὴλ, Κύριός ἐστις ἕνα, κύριος ἐστὶς ἕνα*」(註七)に符合するものである。

この神の獨一性(unicqueness)は、ユダヤ教、拝一神教(monolatry)を成立させる上での最も根本的なものである。このことは一方で、必然的に排他的な態度を、神が信者に要請することになる。この拝一神教の主張の裏面に廻れば、混淆主義(syncretism)の存在に着目せざるを得ないし、またこの混淆主義に対する危機観こそ、拝一神教の存続に、欠くことのできない緊張を与えた、といつてよい。しかしいづれにしても、ヤールウェ信仰におけるユダヤ教は、歴史の変遷の過程で、亡国と捕囚という出来事を通して、他の宗教、他の文化を吸収せざるを得なかった。この点については、以後新たに触れるつもりである。その際併せてユダヤの音楽を論究したい。ところでギリシアの音楽は、大別してエジプトとアッシリアとの影響があるとしたが、ユダヤなどもそれに加えなくてはならないであろう。例えば Phrygia を挙げたが、これは本来、線点を点として考えているごとくであつて、このフリギヤの思想もシリア(Syria)に、シリアはユダヤの思想を、一方北からマケドニア(Macedonia)やトラキアを考慮に入れなければならない。それはギリシア思想が、決して合理主義の精神とは、一概に断定できないからである。それはギリシアにおける宗教思想を取り上げてみるとき明瞭になるのである。

う。ギリシアの紀元前八〇〇頃から四〇〇年頃にかけて、具体的には Homeros から Platon に至る思想の流れに二つがある。その一つは合理的な精神の潮流と、他の一つは非合理的な精神の潮流である。これらは apollon (アポロンの)と dionysian (ディオニュソスの)において、表現されよう。この二つは、ニーチェ(Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844—1900)によれば、ギリシアの悲劇における、二つの内的な要素であるとしているが、これは同時にギリシアにおける音楽に対する基本的な姿勢を二分化することでもある(註八)。アポロンのというのは、静観的、調和的、形式的、純粹性、明朗性を、一方ディオニュソスというのは、恍惚的、激情的、破壊的、官能的、陰鬱的等の性質があるとしている(註九)。思想は生きものである、といわれるように、部分的な、局所的な働きと、全体的な働きとが、織り成しているなかで、生成して行くのであることを踏まえ、なお一方で思想の要素を二分化するのも、理解(Verstehen)するうえにおいて、必要なことではある。ディオニュソスの思想、つまりディオニュソス崇拜の考えが、紀元前十世紀前後に、ギリシアに流入した、といわれるが、このディオニュソス神の信仰の発祥の地については三説がある。一つは北の Thracia (トラキア)地方および Phrygia (フリギア)から、Macedonia (マケドニア)を経て、ギリシアに流入した、との説と、他の一つは、Crete (クレタ)を發祥として、いづれギリシアへ迎え入れられたもの、との説がある。しかしディオニュソス信仰が、トラキア地方において、特に盛んであったという事実から、トラキア説の方が、有力視できるが、また一方それに加えてフリギア(小アジア)を、その地域に入れるとすれば、そこから西

の海、つまりエーゲ海を経て、伝わったとも考えられる。ところでディオニュソス信仰が、どのようなものであったかを知るには、ギリシアの三大悲劇作家の一人、エウリピデス (Euripides, B. C. 485—406) の手による「バックスの狂信女達」によるところが多い(註十)。この神は、「地の神」「春の神」であるが、特に葡萄から酒を造ることを、人間に教えた神、酒の神として知られている。すでにディオニュソス信仰の性格については、アポロンのとの対比において説明してきたように、狂乱と陶酔によって、忘我の域に、つまりエクスタシス (ἐκστασις) に入るところで、神との出会いがある、とする。この男性的な神には、特に女性の信者が、多かつたとされている。この荒々しい神の性格も、ギリシアを南に下るなかで、しだいに同化し、土着化していることが、うかがえるが、それはギリシア人の合理性への接近を意味していた。ところで紀元前七世紀頃、オルペウス (Orphikoi) が創設したオルフィック教は、トラキア地方(一説にはオリュムポス山の近く)から、ギリシアに流入し、中心地であるアテナイをはじめ、ギリシア全土にわたり、遠くはイタリアの南部地方にも広がったが、この神話上の詩人・オルペウスの創設をもって始まる密儀宗教は、ディオニュソス信仰から独立した、その一派であって、特に東方の密儀宗教からの影響がうかがえる。しかしこのオルペウス教とはいえ、ディオニュソス信仰から派出した一派であるから、その崇拜の対象は、あくまでディオニュソスであって、オルペウスは、その真理を伝達する仲介的な存在にすぎない。ところで、このオルペウスの歌声や琴の演奏は、獣や木、石に至ってまで感動し、魅了し、陶酔したあげくに、それぞれが動き、なびいたという伝説さえある程、

前後に比類のない名手であった、という伝説や、音楽の徳をもって、よみ(黄泉)の国から、死んだ妻を連れ帰ったという話は、有名な話である。この琴が、つまり *cithara* であった。すでに触れたように、ギリシアで最も多く見うけられるのが *lyre* で、*lyre* と云うのは、したがって総称であるから、具体的には種々な形があり、それに伴って色々の名称がある。*lyre* とは、一樣に下部が卵形であり、腕にかかえて奏するものを指している。その形には、U字形のものもあれば、V字形のものもある。下部が方形をなし、胸にあてがい、これを抱えてかき鳴らすものを、*cithara* と称し、一方小さな亀の甲あるいは木をもって、これに似せて作ったものを、*chelys* と名付けており、また形が非常に大きいものを、*phorminx* と称している。*cithara* は、アポロン (Apollon) が愛好する楽器で、そのためアポロンの大祭では、この *cithara* に、楽器のうちで、最も高い地位を与えた、という。一方 *aulos* は、フリギアから伝えられた笛であるといわれ、ディオニュソス神の愛好する楽器であった、としている。さてギリシアの音楽には、アポロンの要素とディオニュソスの要素とがあって、この二つの要素が織りなしたかたちで、同化作用を生じ、典型的なギリシアの音楽を特色付けている。

ところでアリストテレスの研究によれば、音楽の様式は、三つに分割できるとする。つまり *ethos* 「倫理的」、*pathos* 「行動的」および *diastasis* 「熱狂的」である。このなかでも「倫理的」は、旋律・節的であり、*Doris* 調である。「熱狂的」は律動的で、*Phrygia* 調であるとしている(註十一)。楽器の性質からみると、*kythara* (堅琴)の演奏が、「倫理的」であるのに対し、*aulos* (堅笛)は、バックス的であるとして分

類している。一方かれは、音楽の有効性についても触れ、一、教育 (paideia) のため、二、浄め (katharsis) のため、三、娯楽 (dasylogia) のため、であるとす。このなかで特に音楽としては、教育、浄めを通じて、より広く効果を挙げるべきだ、としている(註十二)。また Aristoxenos (ca. B. C. 300) によると、音楽および詩、舞踊は、リズムを本質として、実践的かつ文芸的な芸術であるとし、建築および絵画、彫刻は、均勢を本質として、観照的かつ造形的な芸術であるとしている。かれもまた、師のアリストテレスと同様に、音楽が、教育的な効果に秀でていることを主張し、魂 (psyche) の内実は、調和であるとして、ここに魂と音楽との本質的な関わりがあるとしている。さて本旨にもどると、オルペウスは、歌においても、cithara の演奏についても、比類のない名手であったが、それではギリシアにおける歌と音楽との関係は、どのようなものであろうか。またそれに加えて、ヘブル的な音楽は、歌詞よりも旋律に重点が置かれ、その旋律は、一定の形式をもっていることにある。この点については、他の章で『旧約聖書』における楽器をめぐって、触れてみたい。

三

古代ギリシアでは、文学と音楽とは、不離の関係にあった。ところでギリシアにおける音楽は、今日のように、学問の領域が分科したうえで、その一科に相当するものではない(註十三)。つまり古代ギリシアの μουσική (ムシケー) は、語源上の意味は、熱烈に希求する、探求と愛

知のことを指しており、なによりも paideia (教養) に近い、文化理念の担い手であった。それにつて、どのような意味であったかは、Platon の Phaidon で、「哲学こそは、最高の μουσική であり」(註十四)と述べているところで、ムシケーの性格も明らかになってくる。つまり一口に云って、ムシケーは哲学である、とする(註十五)。Sokrates は、知恵をきわめて実践的な方法において、探究したが、ムシケーについても、みずからが創作し、歌いあげることこそ、episteme (真知) の明しあかになる、と考えていた。したがってムシケーは、真理を語り、歌い上げる意味において、また一方では哲学なのである。ギリシア人たちは、語るところを好んだ。語ることによって、かれらは、真理に導びかれた。したがって語ることは、歌うことであり、歌うことは、語ることであり、真理の現前化にほかならなかった。それゆえギリシアの音楽が、文学と一体化する、といえよう。ムシケーとは、歌うことをもって、真理を愛求し、現前化する行為であり、それは同時に真理の語りにはかなならず、魂 (psyche) の浄化 (katharsis) をなすものであった。このようにみても、と、ギリシアの音楽は、詩 (poietai) と密接な関係があることも、また詩から切り離すことのできない存在であったことが、うかがえる。この結果個々の詩には、個々の音楽を要求することになり、音楽は、常に詩によって制約されるという立場にあった。このことは音楽が、詩に対して付け加え的存在である、とする。一方歌詞以上に、音楽の位置が、高められると同時に、一方音楽文化への進展は、以後キリスト教教会の音楽をもってはじめられる(註十六)。ところで以上のような見方を取るのには、そこに立場がある。つまり詩を文学の、歌 (oia) を音楽の範疇

に入れて考えるとき、音楽は文学の付随的な位置にあるとする。また音楽は、詩の添物であるとする。このような見方は、本来のギリシア的な考え方ではない。むしろラテン語の *Musica* 以後の中世、近代を経て、現代における各学問の独立化、分節化を通して、ギリシアにおける音楽と詩との関係を批判したものである。ところで典型的なギリシアの思惟は、合理的な精神の働きのによるものである。ソクラテスが、哲学こそが最高の *mousiké* (音楽) である、と云ったのは、音楽 (*mousiké*) を最も根源なるもの、それは根源に真理を愛求する哲学と同位置にみたらからである(註十七)。詩人へのみ、真理を持ち来たらし、真理の近くに住む、との考えは、ギリシア人が、詩人に懐いていたものである。つまり神々(真理)の近くに住むという詩人への畏敬の思いは、そのままギリシアにおける詩人の位置を高貴なものとしている。このことはアポロンの大祭における詩人および楽器の演奏について、ギリシア人は、格別の評価を与えていたことに結果した。つまり、ここでは詩と歌との一体化があり、詩は歌を通して、詩となり、歌は詩のうちで歌となる。一方詩人は、自分であるいは伴奏者の助けを借りて、楽器を演奏したであろう。この場合、歌詞の朗唱とその韻律に、メロディー (*Melodie*) が、完全に調和していたことがうかがえる。ところでヘブル的な音楽は、歌詞よりも、旋律を重要視した結果、旋律には一定の形式があったとした。この意味からギリシアとヘブルとの間には、やや対称的な面もうかがえるであろう。また時代を下って、キリスト教における音楽の位置は、ヘレニズム化の時代のなかにあっても、ヘブルにおける考えを、貫流しており、その形式は、キリスト教教会音楽へ、いかに伝承している。キリスト

教において、音楽(この際は主として、詩の歌唱を指す)が、どのような位置にあるかは、イエス・キリスト (*Iesus Christos*) と、どのような関係にあるかによって、その位置が、まず決定することになる。それではイエスと音楽、ひいてはヘブルにおける音楽へと問題の論点を移そう。

四

イエス・キリストは、ユダヤ人として現われ、だれよりも秀れて敬虔なユダヤ教徒であるとして、常に真にあるべきユダヤ教の姿を、時代性の理解のうえに、実現しようと努力された。それは神の原初的な次元において、神のことは、聴くことであり、神のことはその意味を、新たに現実に沿って実行し、実現することであった。つまりイエスを通して、神の意志を実現することに外ならず、神の意志の反映は、同時にイエスの意志の反映として実現された。一方イエスの意志は、神の意志の反映であるとして、受け入れた。これはすでに、神と人間との関係を、*Imago Dei* として捉えていたユダヤ人にとって、驚きであった。つまりイエスの実在は、神の実在を意味していたからで、神とイエスは、本質において同一である。この関係は、イエスがゴルゴダの丘の死により、再び復活することによって実証されたとする。ところでイエスの地上における言動は、ユダヤ教の聖典『旧約聖書』に依存するところが、きわめて大きい。特にイエスが、十字架における「三句」(註十八)は、すべて『旧約聖書』の *Psalmodia* (詩篇) に依るものである。また最後の晩

餐の後、イエスは十二弟子と一緒に、讚美を歌ったのち、近くのオリブ山へ出かけて行った(註十九)。この〈讚美を歌った〉とは、詩篇頌の一三から一八にかけての、いづれかであった、と云われる。このような出来事に直面し、イエスおよびその弟子たちが、言葉にし歌にしたものが、まぎれもなく『旧約聖書』の Psalmodia であったことは、なにを意味するであろうか。つまりこの場合、危機に直面するイエスの精神は、まさにこの「詩篇」のうちであり、それを依り所としていたこと。これを、さらにスライドさせるなら、イエスは「詩篇」や「イザヤ書」を通して、神の交通がうかがえる。ここで「詩篇」における神として、限定的に指示したのは、「神の歴史」には、色々な過程を通して、神観念が成立しているということから、神の存在については、必然的に限定することになる。例えば Abraham, Isaac, Jacob (アブラハム、イサク、ヤコブ)の神は、E (Elohim) 資料(註二十)によれば、山獄の神 *Eishadday であるといひ、またこの Shadday は、バビロニア語の šadu (山)に通ずる語である、とされている。紀元前十四世紀には、固有名に、ヘブル語の Schadde ámmi が見つけられる。これは Schaddy (山獄の神格)と関連するものである。さてユダヤ人たちは、血族としてセム族(註二十)の流れを含むものであり、古代のメソポタミアを、その居住地としていた。かれらは当時 (B. C. 2000頃) 自然崇拜の形式において、宗教生活を営んでいた。その崇拜の対象が、山、岩石、石柱、井戸、泉、河川、常緑の樹木などであった。一方かれらは、平原を流れる Tigris と Euphrates の河が、沃地をかかえ、東には Zaglos 山脈によって仕切られていた。この山脈の中で高いものは、四〇〇〇メートルを越える、例えば

Dinar 山のように四二七六メートルを数えるものがある。この現実はいやがうえにも、呪力性の担い手となり、崇拜の対象となったであろう、ことが想像される。したがってアブラハムやイサク、ヤコブの族長時代における神は、風土性、地域性の色彩がいたって強いもので、自然崇拜の域を出ていない。例えばアブラハムからダビデへ、ダビデからイエスに至る歴史の変遷に伴って、神の性格もまた変化してきた、といえる。つまりキリスト教の神、ユダヤ教の神 Yahweh (YHWH) は、ミデアン地方、シナイ半島の東、アカバ湾の北にあたる、アラバと称する地域で、ここにミデアン族、ケニ族(註二十二)が居住していた。エジプトを脱出した Mōshe (モーセ) は、しばらくの間、かれらの領域に滞在していた。ここでモーセは、ケニ族の祭司エテロ(聖書など文書資料によると、リウエルと呼んでいる)の娘チッポラと結婚した(註二十三)。結婚の際の儀式は、エテロの手によって、ケニ族の神 Yahweh の神前において取り行なわれた、といわれる。この一部族の神であるヤーウェの神は、密儀宗教の性格をもっていた(註二十四)。ところで Mōshe は、シナイ(ホレブ)山において、はじめてヤーウェの神の顕示に出会うというのであるが、しかしながら直接、このヤーウェ神から啓示を受けているとはいえず、かれはすでにヤーウェ信仰については、祭司エテロを通じて、すでに知っていたことが、ここで指摘できよう。ところでこのヤーウェが、シナイ山において、顕示した事実をとって、自然宗教から啓示宗教への相違を示したものとするが、しかし依然自然神としての性格がうかがえる。特にミデアン半島の部族神、火山の霊としての性格が、残存しているように思われる(註二十五)。さて神観念は、部族から民族へ

と変遷するなかで、定着する。例えば部族神であった Yahweh 神は、十部族の連合のもとに、民族神の性格をもつようになった。この神は民族神 (Israel) から、イエスの神へと移行してくるのである。ヘブルの音楽は、支配する Yahweh を度外視して語ることはできない。それはヘブルの民族とその歴史を記述する聖典『旧約聖書』を依り所にみるからであろう。しかしわたくしたちは、ヘブル民族の音楽について、『旧約聖書』以外に、少ない彫刻やレリーフが、それにしても資料となるものは、殆どない。論旨は宗教を中心においてみるため、それゆえ本稿の主たる文献は、『旧約聖書』が中心にならざるを得ない。

五

ユダヤ人の音楽を、『旧約聖書』のなかに記載しているものから、判断すると「ラッパの声をもって主をほめたたえよ。立琴と琴とをもって主をほめたたえよ。鼓と踊りとをもって主をほめたたえよ。緒琴と笛とをもって主をほめたたえよ。音の高いシンバルをもって主をほめたたえよ。鳴りひびくシンバルをもって主をほめたたえよ」と「詩篇」第一五〇篇にはある(註二十六)。ここにもうかがえるように、主として楽器は、琴 (*shālta* 豎琴・*kidōnā* 琴)、『ラッパ』 (*shōfar*)、鼓 (*duf*)、シンバル (*shōsharim*)、笛 (*shōfar*) 等のものである。その他鈴、フルートを使用的にしているが、前記のものに比べると、その使用例は、いたって少ない。まず鈴 (bell) については、「出エジプト記」が参考になるであろう。それによると「そのすそには青糸、紫糸、緋糸で、ざくろを作

り、そのすその周圍につけ、また周圍に金の鈴をざくろの間々につけなければならぬ。すなわち金の鈴にざくろ、また金の鈴にざくろと、上服のすその周圍につけなければならぬ。アロンは務の時、これを着なければならぬ。彼が聖所にはいって主の前にいたる時、また出る時、その音が聞えて、彼は死を免れるであろう」(註二十七)と。また同様の説明が、次の三十九章二十四から二十六にかけて、つまり「上服のすそには青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸で、ざくろを作りつけ、また純金 (*zōroth*) で鈴を作り、その鈴を上服のすその周圍の、ざくろとざくろの間につけた。すなわち鈴にざくろ、鈴にざくろと、務の上服のすその周圍につけた。主がモーセに命じたとおりである」(註二十八)とある。ここで鈴が純金製のもので、上服の裾の周圍およびその開いた口(ざくろ)に取り付け、動く度にその鈴が鳴る仕組みであったし、災難を避けるためのものとして意義があった。ところで鈴は裾に付けるだけではなく、馬にも付けられた。すなわち「その日には、馬の鈴の上にへ主に聖なる者」と、しるすのである」(註二十九)から、鈴が主(神)の選びによって、神聖なしるしを受け入れるところのものとなる。したがって鈴は、鳴り物としての道具以上に、神の承認の担い手であり、そのしるしであった。一方フルート (*shōfar*) については、「ダニエル書」を引証すべきであろう。それによるとフルートが、多種にわたることがうかがえる。例えば「時に伝令者は大声に呼ばわって言った、へ諸民、諸族、諸國語の者よ、あなたがたにこう命じられる。角笛、横笛、三角琴、立琴、風琴などの、もろもろの楽器の音を聞く時は、ひれ伏してネブカデネザル王の立てた金の像を拜まなければならない」(註三十)と云い、また

同章の七、一〇、十五においても同様の記述がある。つまり trumpet (角笛)、pipe (横笛)、racket (風笛) が、すでに当時においても、*azōs* (笛) は様々の種類があったことがうかがえる。ここでは、フリユート風のものについて、前述したギリシアにおけると同様に、一本の管(単管)のものか、二本を結んだ管(複管)のものかは、明確ではない。しかし一方で存在したであろうことは、他の国からの影響関係で、十分推測できる。ここで問題を琴、ラッパ、鼓、シンバル、笛等に転ずることにしよう。

琴については、まず「創世紀」に、次のような、すなわち「アダはヤバルを産んだ。彼は天幕に住んで、家畜を飼う者の先祖となった。その弟の名はユバル (Jubal) といった。彼は琴や笛の執るすべての者の先祖となった」(註三十一)としている。つまりユバルは、琴と笛との発明者であるという。この琴は、のちダビデが演奏に使用したものである。これは手で持ち運びが出来るもので、lyre (抱琴) の種類であったであろう、とされている。この種類のもはエジプトにおいても使用していたが、しかしヘブル人のものは、それよりも粗末であった、と想像されている。ところでヘブル人にとって、まず楽器が、神聖なる道具であること、それが祭司族であるレビ人やダビデ (註三十二) によって奏されるが、それが主として神殿礼拝の際に使用されている。例えば「ダビデとイスラエルの全家は琴と立琴と手鼓と鈴とシンバルとをもって歌をうたい、力をきわめて、主の前に踊った」(註三十三)と。さらに「——またレビびとの歌うたう者、すなわちアサフ、ヘマン、エドトンおよび彼らの子たちと兄弟たちはみな亜麻布を着、シンバルと、立琴と、琴をとって祭壇の東

に立ち、百二十人の祭司は、彼らと一諸に立ってラッパを吹いた。ラッパ吹く者と歌うたう者とは、ひとりのように声を合わせて主をほめ、感謝した、そして彼らがラッパと、シンバルとその他の楽器をもって声をつりあげ——」(註三十四)と、「歴代志下」の二十九章二十五から二十八においても同様の記事が、うかがえる。それでは琴が、どのような状況のもとに使用しているのであろうか。『旧約聖書』によるかぎり、もてなしの際に使用する場合と讚美に使用する場合が多く、特に、ダビデの歌と関連して、「詩篇」のなかに、うかがえる。琴の種類には二種があった。つまり「十弦の琴」と「三弦の琴」である。例えば、十弦の琴は「詩篇」において、「琴をもって主をさんびせよ、十弦の立琴をもって主をほめたたえよ」(註三十五)と、三弦の琴については、「サムエル記」において、「手鼓と祝い歌と、三条の琴をもって、歌いつ舞いつ、サウル王を迎えた」とある。これは主として女性によって演奏された。

それでは、ここでラッパ (*azōs*) について、触れることにしよう。それは、まず「ヨブ記」の三十九章二十四、二十五において、代表されるよう。つまり「これはたけりつ、狂いつ、地をひとのみにし、ラッパの音が鳴り渡っても、立ちどまることがない。これはラッパの鳴るごとにハアハアと言ひ、遠くから戦いをかぎつけ、隊長の大声およびときの声を聞き知る」とあるように、ラッパは、戦争の際に使用する場合が多い。次には王の即位の際にも使用している。例えばエヒウの即位(註三十六)に、ソロモンの即位(註三十七)に、ヨアシの即位(註三十八)の際に、ラッパを用いている。また王(神)の櫃の前で、ラッパを吹く慣習がうかがえる。これは神殿礼拝の問題と関連している。ラッパには、金製のもの

と、羊の角製のものがあるが、この際祭司達は、銀 (*argenteus*) のラッパを使用している。神殿礼拝とは、具体的には主の讚美のためのもので、神殿献堂、第二神殿の基礎造り、城壁の竣工、贖罪の日、祭日、犠牲に対して、ラッパを慣例として用いている。

次に鼓 (*tympanon*) に移ることにしよう。鼓は、主として手太鼓のことで、踊り、祭りの伴奏として用いていた。例えば「歌う者は前に行き、琴をひく者はあとになり、おとめらはその間にあって手鼓を打って言う」(註三十九)ごとくである。ここで、この手太鼓を鳴らすものが、主として女性であること、娘の場合もあれば、婦人の場合もある。

次に饒鉞 (*kymbalon*) に触れると、饒鉞は、*cymbals* と訳出されているが、この饒鉞には、真鍮または銅製のものがあつた。この楽器は、主として神殿礼拝の際に使用している。これに関連して贖罪祭日、第二神殿の定礎、城壁竣工等の際にも、奏している。例えば「ダビデはまたレビびとの長たちに、その兄弟たちを選んで歌うたう者となし、立琴と琴とシンバルなどの楽器を打ちはやし、喜びの声をあげることを命じた」(註四十)とある。レビ族は祭司族であったが、このレビ族が、特に楽器と縁が深い理由として、次のような理由が挙げられよう。「歴代志上」第二十三章によると「ダビデは老い、その日が満ちたので、その子ソロモンをイスラエルの王とした。ダビデはイスラエルのすべてのつかさおよび祭司とレビびとを集めた。レビびとの三十歳以上のものを数えると、その男の数が、三万八千人あつた。ダビデは言った。へそのうち二万四千人は主の家の仕事をつかさどり、六千人はつかさびと、およびさばきびととなり、四千人は門を守る者となり、また四千人はさんび

のためにわたしの造つた楽器で主をたたえよ」(註四十一)との理由において、レビ族は、祭司族として、なお一方で楽器を演奏するところの特定の資格を、主より得たのである。ここでダビデによって楽器を奏することが、あらためて特定されたこと、このことはダビデ以後のユダヤの宗教における、楽器の位置を明確にするものである。

それでは最後に笛 (*avlos*) について説明しよう。前述したように、琴と共に笛は、ユバルによって発明された。ところで「創世記」第四章二十二では、*phatthivon kai kidápan* となっており、笛 (*pháthos*) は、種類として後の *organ* に入るものである。一方「エレミヤ書」第四十八章三十六(註四十二)における笛は、*avlos* となっている。つまり吹奏楽器としての *pipe* に相当するものと考えられる。また「創世記」第四章における笛は、オルガンの種類に入るとしたが、「詩篇」第一五〇篇の四における笛は、*oyavon* で、shofar Flute に相当する。しかし実物が現在存在しないので、『旧約聖書』を通じて、当時の彫刻やレリーフに依るところが多く、想像や推測を加えるに、やむをえない実情を背にしている。そこで例証を掲げると、「民は皆へソロモン王万歳」と言った。民はみな彼に従って上り、笛を吹いて大いに喜び祝った。地は彼らの声で裂けるばかりであつた」(註四十三)とあるように戴冠式の際に使用しており、讚美の為に吹奏している。特に悲しみを伴つたものとしては、「ヨブ記」第三十章三十一の「わたしの琴は悲しみの音となり、わたしの笛は泣く者の声となつた」と。ところで笛が、『旧約聖書』におけるかぎり、単独で使用することは少くない、それはヘブル人の宗教における音楽の在り方を基本的に示すものである。つまり合唱、合奏は、宗教体

制のうちに位置付けられている。ヘブルの音楽については、民族の歴史的な変遷と無関係ではない。大きく分けてエジプト以前と出エジプト以後において、考える必要がある。つまりヘブル人の音楽に、独自のものがうかがえないとするのは、他民族との影響関係のなかで、存在しているからである。エジプト以前と云うのは、セム族の郷土である Tigris 河と Euphrates 河との下流地方に、紀元前二三〇〇年頃より一三〇〇年頃に至って、カルデア国が成立していたが、ここはまたアブラハムの故郷でもある。カルデア（アッカド人とセム族の混血種族）とは、主として当地に居住していた民族およびその地域を指している。しかし、その後紀元前六二六年に、新バビロニア帝国つまりカルデア王朝が成立し、アッシリア帝国を滅し、メソポタミア全域を支配したが、この新バビロニア帝国の民を、『旧約聖書』では、特にカルデア人と呼んでいる。したがって、ここで指摘するカルデアは、時代的に云って新バビロニア帝国以前を指している。つまりヘブル人は、以前カルデア系の独自の楽器ならびに、その形態のものがあつたであろうことは推測される。例えば「創世記」では、楽器に関する記述が、いたって少ない。そのなかにあつて、特に四章二十一および三十一章二十七が、注目される。この三十一章とは、ヤコブの帰国に関する記事であるが、ここに「わたしは手鼓や琴で喜び歌ってあなたを送りだそうとしていたのに」（註四十四）と記している。この手鼓と琴とは、時代的にエジプト以前であると推測される。また出エジプト以後は、主としてエジプト系の楽器に依るところが大きい。音楽をはじめ楽器の使用が、最も盛んであつたのは、ダビデおよびソロモンの時代である。特にヘブル人の楽器との関係を顧みるとき、

ダビデの存在、特に琴との関係を考えなければならない。古代における思想の複合性については、「はじめに」において、その要因に触れたが、特にヘブルの思想は、部族から民族へ、国家の建立、滅亡、捕囚、離散など、今日にいたっては、他の民族の歩みのなかに、その例をみない。この歴史の歩みにおいて、ヘブルの人々は、他文化、他民族との出会いと吸収との機会をもった。ヘブルの音楽が、独自性をもたないとするのは、大きくは歴史的な背景による。西洋音楽の発達とその源流をおよそ次のように、すなわちエジプト、アッシリア、ヘブル、ギリシア、古代ローマ等に分割し、整理して、枠組みに入れるが、しかし歴史の流動性からの次元では、相互に影響し合っている場合が多い。例えばヘブルの音楽は、エジプトやアッシリアの音楽の影響を受けたであろうことが、指摘できるであろう。

さてヘブル思想は、聴覚的機能の働きにおいて富んでいるとして、特にそれと関係の深い音楽、なかでも楽器を取り上げてきたが、この聴覚的な思想は、一方「聖」と「しるし」とに関連しているようにも思われる。つまり聖なる意味には、明るいと輝くという意味と、一方分離という意味があるとした。この後者の分離は、神と被造物としての人間との関係を意味しており、この場合神が俗なる人間に関係しているかぎり、神は聖なるものである。したがって聖は、存在概念ではなくして、関係である。それゆえ分離は、一方で関係を現わしている。このことから、必然的に「見ざる」という考えも、俗の在り方としての人間存在と神との関係を表明するものとして生じてくる。例えば「出エジプト記」で、主は「またモーセに言われたへあなたはわたしの顔を見ることはで

きない。わたしを見て、なお生きている人はいないからである」(註四十五)と、さらに加えて主は言われた、「わたしが通り過ぎるまで、手であなたをおおうであろう。そしてわたしが手をのけると、あなたはわたしのうしろを見るが、わたしの顔は見ないであろう」(註四十六)とある。この神の姿勢は、『旧約聖書』における神の基本的な姿勢であって、偶像礼拝を否定することと、一方 *ἐπιφάνεια* (顕現) としての性格をも現わしている。

おわりに

プラトンは、ギリシアにおける音楽が、まさに哲学することの位置にあるとして、それをソクラテスの語りのうちにみている。たしかに *μουσική* は、狭義において *Musica* を指すが、広義にみれば、音楽や文芸をも含め、教養 (*παιδεία*) に位置する。徳 (*ἀρετή*) を実践する最上のものは、*μουσική* (ムシケー) であり、文芸である。この意味において、ロゴス (理論) を実現することの行為 (*πράξις*) であるにはかならず、音楽が、まさに感覚 (*αἰσθησις*) を通じて現われる姿に、魂 (*ψυχή*) の内なる調和をみるのである。この限り *μουσική* と知恵 (*σοφία*) とは一致する。たしかにギリシアの思惟は、一概に合理的であるとは言いがけない。それは、ディオニュソス (*Διόνυσος*) の思想においても、目配りする必要がある。そして外来の思想としての位置をも明らかにして置くことも必要である。一方ヘブルの音楽は、主として楽器にもうかがえたように、宗教体制のうちに位置付けられるものである。それゆえへブ

ルの音楽は、宗教と切り離しては考えられない。

ところでギリシアの音楽が、自由でかつ最高の哲学である、とするならば、ヘブルの音楽は、規範的にして宗教の音楽である。つまりギリシアにおける音楽は、知恵および魂との関連において意義をみた。一方ヘブルの音楽は、信仰 (*πίστις*) の関係において、はじめて意義がある。このことは音楽をめぐる知恵と信仰、哲学と宗教との課題を担っている。この両者の関係は、さらにキリスト教会音楽において、整理をし、位置付ける問題でもある。

註

(本学講師 哲学担当)

(註 一) *Miriam, Deborah, Heman* など。つまり *Miriam* は、アロンの姉であり、かつ女豫言者である。『旧約聖書』によると「そのとき、アロンの姉、女豫言者ミリアムは、タンバリンを手に取り、女たちも皆タンバリンを取って、踊りながら、そのあとに従って出てきた。そこでシリアムは彼らに和して歌った、へ主にむかって歌え、彼は輝かしくも勝ちを得られた、彼は馬と乗り手を海に投げ込まれた」(出エジプト記十五・二〇、二十一)にもうかがえる。

Deborah もまた女豫言者であり、イスラエルの士師であった。例えば「士師記」四・四一〇、および五・一〜十二を参照されたい。

Heman は、レビ人で神殿の三楽長の一人である(歴代志上六・三十三、十五・十七、十六・四二) *Heman* の娘である。かれの息子と娘たちは、神殿の歌手であった。つまり「これらは皆、神がご自身の約束にしたがって高くされた王の先見者へマンの子たちであ

った。神はヘマンに男の子十四人、女の子三人を与えられた。これらの者は皆その父の指揮の下にあって、王の宮で歌をうたい、シンのバルの立琴と琴をもって神の宮の務をした。アサフ、エドトンおよびヘマンは王の命の下にあった」とある。

(註二) 「哲学要論」川田熊太郎著、東京大学出版会、二六四頁以下を参照された。

(註三) コリント人への第一の手紙一・一九、二五

(註四) 「哲学要論」川田熊太郎著、東京大学出版会、一七二頁。同書によると、*eidōs* から *eideticism* への必然を、次のように説明している。この *eideticism* = *eidōs* > *eidētikos* > *eidēticus* - *eidēticism* (= *ismos*) である、と云ふ。

(註五) Hugo Leichtentritt: *Music, History and Ideas* (1950) 「音楽の歴史と思想」服部幸三訳、音楽之友社、二五—二六頁。それによると、現存する楽譜は、Pindar のピュティアの頌歌第一曲の最初の一部。Mesomedes の三つの短い讃歌。器楽のエチュードの数の断片、小アジアの Seikilos の墓碑銘。Delphi の神殿において発見された、かなり良く保存された二つのアポロンの讃歌。Euripides の Orestes (Orestes は Agamemnon と Clytemnestra の子、母を殺したために、罪により Furies に追われた) の一の断片。Egypt から発見された Apollo の讃歌をこぼした papyrus。Greece の記譜法で記された A. D. (Anno Domini) 三世紀の初期キリスト教徒の讃歌等を挙げている。

(註六) 黒沢隆朝氏によると、当時のアウロスは、おそらく複簧の葦笛で、二本を同時に口にくわえて吹く、時にはユニゾンであり、時にはドロントウの奏法もあったらしい、とみている。「世界音楽史」黒沢

隆朝著、雄山閣、三十一頁を参照されたい。

(註七) 申命記六・四

(註八) F. W. Nietzsche: *Die Geburt der Tragödie* (Nietzsche Werke) Band I. Vgl. S. 51~88.

(註九) 『悲劇の誕生』秋山英夫訳、岩波書店の「訳注」(S. 239)によれば、アポロとディオニュソスを対照に取り扱っているので、参考までに列記しよう。

アポロ

ディオニュソス

素姓 純ギリシアの神

トラキアのデーモン(鬼神)

住居 天界

大地ならびに下界

聖獣 白鳥、いるか

雄牛、豹、ライオン、蛇

植物 月桂樹

常春藤、葡萄

奉仕者 ミューズの女神たち

マイナデス(酒神信女)

礼拝 静的尊信

興奮的狂躁の密儀

犠牲 供物をする

いわゆる聖餐様式で神自身(雄牛)が犠牲にされ食われる

音楽 荘厳な格調ある音楽

騒々しい舞踏音楽

特性 冷静な自己抑制

陶酔、狂気

(註一〇) 「ギリシア悲劇全集」IV 内山敬二郎訳、鼎出版会、五〇七頁を参照。

(註一一) ドリス調とは、ここでは沈着、勇壮な性質を指し、フリギヤ調とは、熱狂的であつて *dyrracricus* (昂奮をおこさせる)、*rabyricus* (感情的)であることを、指している。

(註一二) Vgl. *Politics*, S. 1341 b. 30 b. (L. C. I)

(註一二) 例えば、中世に至るまで Martianus Capella によつて書かれた「メ

ルクリウスとプ、イロロギアとの結婚」と題された *septem artes liberales* 〈自由七科〉によると、算術、幾何学、天文学、音楽を *quadrivium* 〈上級四道〉に、文法学、論理学、修辞学を *trivium* 〈下級三道〉に挙げてゐる。このなかで *Musica* が上級に掲げられるのである。

(註十四) *φαιδοσφείας μεν οἴσσης μετρωτης μουσικης, Phaedo, S. 60 E—61. List of Plato's Works, 1 (L. C. L)*

野村良雄氏も、この点について、指摘してゐる。「世界史のなかの音楽」野村良雄著、新時代社、四十四〜四十六頁を参照された。

(註十五) プラトンとアリストテレスとの相違を竹内敏雄氏は次のようにみている。つまり「イエガーが、いふように哲学の本質的課題を教育 (*paideia*) に、しかも国家のための教育にみとめた。プラトンは、詩や音楽をも、まったく教育の見地のもとにおいてが、アリストテレスは、芸術に教育的効果を認めながら、それが、これとはなれても、それ自身正当な存在権を有することを基礎付けようとする道をとった。かくしてすべての実践目的から、超脱した芸術が、アリストテレスにおいて、その成立の緒についたことは、かれ自身の著作によつて立証されるであらう」とらつてゐる。「アリストテレスの芸術理論」竹内敏雄著、弘文堂、三十一頁以下を参照。

(註十六) 「宗教音楽の歩み」野村良雄著、音楽之友社、五十四頁以下に、その指摘がある。

(註十七) *ἀλλὰ τ,ν μ,ν πλεστα ἴσῳσαν εἰς τοῦ,ν ἐνὸρθς γυνησομένου φιλσοφου ἡ φιλοκαλου ἡ μουσικου τῶος καὶ ερωτικου, Phaedrus, S. 248, D. Plato's Works, 1 (L.C.L)*

(註十八) この「三句」とは、(イ) マタイ二十七・四十六およびマルコ十五・三十四の「わが神、わが神、なんぞ我を見捨らし」つまり、以下の文、*Et hora nona exclamavit Iesus nocte magna, dicens : Heloi, Heloi, lama sabachani : quod est interpretatum : Deus meus, Deus meus ut quid dereliquisti me ?* (イ) 『旧約』の『詩篇』二十二

・一〇 *'O theos ὁ θεος μου, πρόσχες μοι, ἐπάρτῃ παρατρέτες με ; μακρὰν ἀπὸ τῆς σωτηρίας μου ἀλόγοι τῶν παραπτωμάτων μου.* に相当するもの、(ウ) 『新約』『ルカ』二十三・四十六「父よ、わが霊を御手にゆだね」の *Et clamans voce magna Iesus ait : Pater, in manus tuas commendo spiritum meum.* (イ) 『詩篇』三十一・五 *ἐπιναψα Ἐἰς χεῖράς σου παραθήσομαι τὸ πνεῦμά μου, ἐλυσθήσῳ με κύριε ὁ θεος τῆς ἀληθείας* に相当する。(イ) 『新約』『ヨハネ』十九・二十八「吾れ渴く」の *Postea sciens Iesus quia iam omnia consummata sunt, ut consummaretur scriptura, dixit : Sitio* は、『詩篇』四十二・一二の *Ἐδύψησεν ἡ ψυχὴ μου πρὸς τὸν θεὸν τὸν ζῶντα.* に相当する。

(註十九) マタイ二十六・三十

(註二〇) E (Elohim) 資料とは、神の名を Elohim として捉える一方、この文献が、北の王国 Ephraim におびて成立し、同時に使用されてきたであろうこと。この E 資料の特色は、神の擬人化が、うかがえないこと、および神自ら、おのれの存在を、直接自己示顕するところの方法等がみつけられる。

(註二十一) セム語を語る民族が、セム族と呼ばれるようになったので、したがつて Sem 〈セム〉という名称は、決して人種を指すのではない。

Vgl. B. Wvss : *Der Alte vordere Orient* (Hdb. d. Walge-

schichte. I, 1954) Sp. 203.

(註二十二) シデアン人とケニ人は、銅の鍛冶業を生業として従事していた種族である。

(註二十三) 出エジプト記二・十五―二十二

(註二十四) 出エジプト記三・六、十五、六・三

(註二十五) ところで、モーセ五書においては、記事のうえで、多くの重複がある。これはモーセ人によって書かれたものではないこと、したがって神についても、ときには Yahweh だったり、Elohim だったり、りの重複がうかがえる。

(註二十六) 詩篇十五〇・三―五

(註二十七) 出エジプト記二十八・三十三―三十五

(註二十八) 右同 三十九・二十四―二十六

(註二十九) ゼカリヤ書十四・二〇

(註三〇) ダニエル書三・四―五

(註三十一) 創世記四・二〇―二十一

(註三十二) サムエル記上十六・二十三

(註三十三) サムエル記上十八・六、サムエル記下六・五、歴代志上十三・八

(註三十四) 歴代志下五・十二―十三

(註三十五) 詩篇三十三・二、九十二・三

(註三十六) 列王紀下九・十三

(註三十七) 列王紀上一・三十四、三十九

(註三十八) 列王紀下十一・十四

(註三十九) 詩篇六十八・二十五

(註四〇) 歴代志上十五・十六

(註四十一) 右同 二十三・一―五

(註四十二) Hebrew 語 Vulgate による English は 45—48 なる Septuagint

では 31 になっている。

(註四十三) 列王紀上一・三十九―四〇

(註四十四) 創世記三十一・二十七

(註四十五) 出エジプト記三十三・二〇

(註四十六) 右同 三十三・二十一―二十三

Novum Testamentum Latine (Oxford Univ., 1911). The Septuagint Version Greek and English, 1976 (Samuel Bagster and Sons Limited). 日本語の「聖書」は、日本聖書協会版のものを引用した。